

俳句と川柳

信楽晃仁

松尾芭蕉と言えば日本を代表する俳人です。たいていの人が知っている有名な人です。「おくのほそ道」や「古池や蛙飛びこむ水の音」

「閑かさや岩にしみいる蟬の声」という有名な歌もあります。私はよくはわからないのですが、あえて言えば、小林一茶の方が親しみやすいように思います。

「やせ蛙まけるな一茶これにあり」「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」「やれ打つな蠅が手をすり足をする」庶民的というか、日常を歌にしたような親しみやすさがあります。

俳句とは、五・七・五から成る日本語の定型詩です。これは世界最短の定型詩だということです。

さてその中で、私は近頃川柳に興味があります。先日もあるお寺で落語の会があり、そこで川柳を取り入れて落語を披露してくださいました。川柳も俳句と同じ五・七・五の文体で読むのですが、同じ五・七・五でも、俳句とは全く違った歌になりま



す。どう違うのか調べてみると、

【形式的違い】

俳句には、季語が必用。川柳ではこだわらない。

俳句には、切れ字が必用。川柳ではこだわらない。

俳句は、主に文語表現。川柳は口語表現が普通。

【内容的違い】

俳句は、主に自然を対象に詠む。川柳では、人事を対象に切り取ることが中心。

俳句では「詠む」というが、川柳では、詠ずるのではなく「吐く」「ものす」などという。決して、詠ずるものではない。

【歴史的な分岐】

俳句も川柳も、同じ俳諧の中から生れました。しかし、俳句は、俳諧の発句(さいしよの一句)が独立したもので、季語、切れ字等の発句にとつての約束事がそのまま

引き継がれ、さらに、題材も発句としての格調が保てるものに限られます。川柳は、俳諧の平句が独立して文芸となったもので、発句として必用な約束事がありませ

ん。題材の制約はなく、人事や世帯、人情までも扱われます。川柳はあまり決まり事がなく、自由にして日常を「吐く」ものなのでしよう。

さて、なぜ私がこの川柳に興味を持ったかと言うと、現代社会はストレス社会と言われます。ストレスというのは何かというと、自分の意に反する「怒り」を表す言葉といつていいと思います。私は現代社会全体が怒りに満ちているように思うのです。自分の権利を過大評価し、理不尽とも言える要求を言い散らかす病院の患者さん、学校の保護者、といったモンスター〇〇といわれる人たちが

反日感情を持つ外国人や、ヘイトスピーチと言った外国人差別を堂々と言い続ける反中、反韓の日本人。社会、家庭で行われる殺人事件も同様の怒り。上げればきりが無いほどの怒りの感情が日々テレビや、新聞等々

で報道され続けています。多くが「怒り」の感情が噴出しているように見えるのです。

新聞沙汰にならなくとも、私たちの日常も地域や家庭、そうした中に怒りの感情がどんどんと幅をきかせているように思います。「マッコウ有吉の怒り新党」という番組がありますが、色んな怒りを投書してくる人があとを絶ちません。これがたまたまて爆発するとき、大きな事故や問題になるのではないかと思います。

その中で、川柳というのは、それを笑いに変える、笑いとまでいかななくても、ふっと空気を抜いて、怒りに走りがちの私を止めてくれるブレーキになったり、自己中心的になつて見えなくなっている私に、本当の事に気づかせてくれるようなものになり得るのではないかと思います。

シルバー川柳にこんなのがありました。二、三ご紹介します。四苦(生老病死)編で行きますと

【生の部】「ダルビツシュー一球だけでわが月給」

「この不公平感。」「いつかやる、きつとやるぞと、も



う定年

「あつという間に時間は過ぎます。」「人生にカーナビあれば楽なのに」

「人生の目的地わかっていきますか?」

【老の部】「目覚ましのベルはまだかと起きて待つ」

「名が出ないあれ、これ、それで用を足す」

「深刻は情報漏れより尿の漏れ」「手をつなぐ、昔はデート、今介護」「なぜ消える眼鏡と鍵のミステリー」

【病の部】

「三時間、待つて病名、加齢です」「お年です。それが病気か田舎医者」「延命は不要と書いて医者が良い」「無農薬。こだわりながら薬漬け」「飲み代が酒から薬にかわる年」

「これも説明の必要なしですね。」

【死の部】

「お迎えはどこから来るのと孫が問う」

「日帰りで行ってみたい天国に」(極楽にして欲しいな)

「先に行き待てど暮らせど来ぬ女房」

「仏教には、こら辺の悩みを解決する智慧があるのにな」

色んなストレスがありますが、それをこうした川柳にして笑い飛ばしてみよう。あるいはにんまりしてみよう。怒りや暴力に繋がりがねません。それを笑いに交換していくことが必要です。落語も同じく人生や世間を風刺するものだと思います。

生老病死する私たち。それはやはりストレスです。悲しみや怒りや寂しさ、色んな感情が出てきます。しかしそれをこうした川柳で受け止めるとき、怒るしかない、泣くしかない私を相対化してくれて、その感情が和らいだり、見失っていたことに気づかされたりするのはないかと思



仏事のイロハ

合掌の作法

如来さまに礼拝するときに欠かさないのが念珠です。珠数ともいいますが、浄土真宗では念珠という言い方が多く用いられています。この念珠は礼拝の時に用いる法具です。最初は念仏を数えるものとし、また煩惱の百人を基本にしていたようですが、現在の単念珠(短い念珠)は数に規定があるわけではなく、手の大きさや珠の大きさに合わせて作られています。

浄土真宗では、念珠を煩惱を滅する為の道具として用いるのではなく、また、読経や念仏の回数を数える為にも使われるものでもあります。ただ、如来様に合掌礼拝する時の礼儀として、用いているものです。

お念珠は大切な法具ですから、お経本と同様、畳や



床に直接置いたり、投げたりはしないように気をつけてください。さらに、法要などに参拝する折には、念珠と共に門徒式章をかけるように心がけてください。念珠の持ち方と、合掌礼拝の作法は次の通りです。

- ①念珠を持つ時は、房を下にたらし、左手で持つようにします。合掌の時は両手に向け、親指で軽く押さえます。
- ②合掌は胸の前で両手を合わせ、伸ばした指先が上体と四十五度の方向に来るようにします。そしてお念仏を称えます。最近では声を出してお念仏を称える方が少なくなってきたようです。「黙念」という作法はありませんが、合掌するときには必ず声を出してお念仏申してください。
- ③礼拝は、念珠をかけて合掌したその姿勢で上体を四十五度前に傾けて、おもむろに元の姿勢に戻します。